

---

# IS ~ 星を目指す黒 ~

飛龍明浩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（星を指す黒）

### 【Nコード】

N9411Y

### 【作者名】

飛龍明浩

### 【あらすじ】

IS<インフィニット・ストラトス>とは、別の意味を持つIS<インフィニティ・システム>を搭載した機体を持つ少年、矢上龍也。

彼はISの性能テストのためIS学園へと入学する。

そして、彼は学園で起こる数々の事件へ巻き込まれていく。

く星を目指す者く（前書き）

同時に書いててこっちのほうに乗りに乗って完成が早かった。

月末までにはもう片方もしあげます。

## 「星を目指す者」

第一章 星を掴むために  
「もつひとつのIS」

IS学園。インフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるマルチフォーマルスーツを操縦するための学園だ。

その中に異彩を放つ人物が二人いる。

初の男性IS操縦者としてニュースで発表された織斑一夏。そして、この俺、矢上龍也だ。

本来であればISというものは女性にしか扱えない代物である。しかし、織斑一夏に関しては、前述のとおり理由で身の安全という面でこの学園に通うこととなった。

俺に関しては、ISのおかげで女尊男卑の世界を変えるべく、一部のマッドサイエンティストと呼ぶにふさわしい人物達が作ったインフィニティ・システム、こちらも略称ISが何処までISに通用するかを見るために某所から派遣されてきたテストターだったりする。

インフィニティ・システムについてはいずれ紹介するでしょう。

女子高に男子が紛れ込んだようなものなので、好奇の視線にさらされることは覚悟していたが、これはきつい……。

「皆さんそろっていますね、それではSHR始めますよー」

すこしおっとりとして、どこか抜けていそうな雰囲気的女性が教

壇に立ち自己紹介をする。どうやら、副担任の山田真耶先生らしい。わりとはつきりと自己紹介をしていたがあくまで副担任らしい。おい、担任は何処へ行った？

「それでは、出席番号順で自己紹介をお願いしますね」

哀れもう一人の男子、織斑一夏。名前が早いがために俺より先に自己紹介をさせられるようだ。

「織斑君。織斑一夏君！」

「は、はいっ!?!」

ボーっとしていたのか、山田先生に呼ばれたため驚いて思わず叫んでしまった。さらにそれに驚き山田先生がものすごく腰を低くして織斑に自己紹介をお願いしている。その光景を見ながら、ものすごく帰りたくなってきた。

「織斑一夏です……」

沈黙が続く。何を言っているのか困っているようだ。近くの子に助けを求めるように顔を向けるが、すぐさま顔そらされている。こちらにも顔を向けようとしていたが、視線を向けられる前に顔を窓の外へ向ける。ああ、今日の空も蒼いな……。

「以上です」

まるで、某お笑い番組のように椅子からほとんどの人が席から転げ落ちる。ある意味、ハードルが低くなって自己紹介が楽になった。

バシんツ、と何かをたたくような音がする。

「げえ、関羽!?!」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者め」

スーツを着た凜々しい女性が教壇へ向かっていく。

「諸君、私が諸君の担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。逆らってもいいが、返事はイエス以外受け付けん」

「キヤーーーーー!」

あまりの音量に耳をふさぐ。死ぬかと思った。そうか、この人が担任か。俺、生きていけるかなあ……。

周りの話を聴いていると、どうやらIS関係で世界的に有名な人らしい。ISのニューズなど、研究所のほうでは技術関連以外はタブーだったからな。情報なんて入ってくるはずがない。

その後の会話で判明したのだが、どうやら担任は織斑一夏の姉らしい。姉弟で教師と生徒、しかも同じクラスってのはどうなんだろうか。

騒ぎがいったん収まり、自己紹介がつつがなく進んでいく。そして、とうとう俺の番まで来た。

「よし、次は矢上。自己紹介をしる」

「はい。矢上龍也です。字だけ見ると『タツヤ』と呼ばれますが、『リヨウヤ』です。趣味は読書、主に技術書を読んでいます。将来の夢は宇宙へISを使って行くことです。よろしく願います」

とりあえず、これだけ言っておけば文句は出ないだろう。

「よし、次……」

織斑先生の威圧でそのまま自己紹介は続けられた。そして、全員の自己紹介がおわったところで、『一時間目』の終了のチャイムが鳴る。

ISの専門的な学校とはいえ、世間一般では高校に分類されるIS学園である。ISの授業に多く時間を割くとはいえ、消費しなければ鳴らないカリキュラムがあるわけ。

そのために入学式初日から一日フルで授業という素敵な時間割が通達されている。

精神的に疲れているので帰りたいです。

休み時間になると、こちらに織斑がやってきた。

「よ、よお」

「ん？」

「大変だな、男二人だと」

「そうだな。まあ、女子高に男二人が紛れ込んだような状況だ。あの程度は覚悟しないとこの先やっていけない」

「そんな簡単に俺は割り切れないなあ」

目の前のさわやかイケメン、織斑一夏は苦笑しながら俺の言葉に返事を返す。

「少しいいか？」

「箒？」

織斑が視線を向けて顔を背けた女子だ。なるほど、知り合いだったのか。

「俺のことはいいから行ってやれ」

「あ、ああ。すまん」

箒と呼ばれた女子に連れられて織斑はどこかへ行ってしまった。しかし、箒か。掃除用具の一つだよな。あだ名か何かか。後日、本人にこのことを聞いたらものすごい勢いで怒鳴られてしまった。口は災いの元だ。

「ちよつと、よろしくって？」

「ほえ？」

織斑たちの方に意識を向けていたため、声をかけられて間抜けな返事をしてしまった。

「まあ、なんてはつきりしない返事ですよ!？」

「すまん。ボーっとしてた。で、どちらさまですか？生憎と、まだ



クラスのメンバーの顔と名前が一致しないんで改めて自己紹介をしてほしいんだが。ああ、俺は矢……」

「わたくしのことを知らない！？イギリスの代表候補生であるこのセシリア・オルコットを！？入試主席であるこのわたくしを！？」

ああ、典型的な女尊男卑思考の方だ。嫌いとはまでは言わないが苦手な部類の人だ。

「すまん、世間に疎くてな」

「まあよろしいですね。わたくしはイギリス代表候補生である前に一人の淑女ですから、この事は水に流して差し上げましてよ、ヤガミ・タツヤさん」

「リョウヤだ」

「あら、失礼いたしましたわ。ああ、あなた男性なのでISに詳しくありませんでしょうか？よろしければわたくしが教えて差し上げてもよくなってよ」

無性に殴りたくなってくる言い回しだが我慢だ。何処その企業のお偉いさんを相手にするよりかはかなりましだ。

「間に合っている」

「あら、実技でもよろしくってよ。何せ、『唯一』試験で教官を倒したのですから」

ああ、そんな試験もあったな。

「あれか。俺も勝ったな」

言ってしまったって後悔する。この手の人物は自分が一番だと思っているパターンがおおいのだ。確実に余計な種をまいてしまった。もはや回収不可能だ。流れに身を任せよう。

「ほ、本当ですよ……？」

「あ、ああ。不意打ちに近い形だったが何とか辛勝といったところだったが」

われながらあれは卑怯だと思った。教官の方には申し訳ないことをした。

時間がたったのか、チャイムが鳴り響く。二時間目の準備をしなければならぬ。

「ま、また後で来ますわ！覚悟してなさい！」

何を覚悟しろというのだろうか。そんなことより、今度は自分の名前を間違えないで言って頂きたい。名前を間違えられるってのはなかなかきついですよ。

二時間目の授業が終了する。そして、不気味な威圧感を出しながらオルコットがこちらに向かってくる。

だが、俺は現在それどころではない。ある場所へ急いでいかなければならないのだ。

「ちょっと、何処へ行くおつもりですの!？」

「トイレだ!」

本来女子しか居ないはずのこの学園。男子トイレは職員室が事務室近くまで行かないとないのだ。さらに言うなら、そこまでの距離はかなり遠い。急いで行かなければ次の授業に間に合わない。

「し、失礼しましたわ……」

オルコットから了解をもらい、急いで用を足しに行く。

なんとかぎりぎり帰ってこれたと思いきや、教室の中からオルコットの叫び声が聞こえてくる。

「お、お、覚えてなさい!」

織斑に向かって捨て台詞を吐いて自席に戻っていくところだった。先ほどの俺とのやり取りに似たようなことがあったのだろう。ひとまず、織斑に話しかけておく。

「どづしたんだ？」

「さ、さあ？」

さて、織斑先生の初授業。普通の授業かと思いきや、いきなりクラスの代表を決めると言い出した。

「自薦・他薦は問わん。誰か意見があるやつはいるか」

「はい！織斑君がいいと思いまーす」

「私もー」

「お、俺！？」

自薦・他薦問わないのだったらそうなるだろうな。そして、この流れだと当然。

「私は矢上君を推薦しまーす」

「私も矢上君に一票ー」

「ですよねー」

しかし、俺が乗っているのはインフィニット・ストラトスではないので、推薦されてもなれない気がしないでもない。まあ、こうなるとあの人が反応しそっだが。

「納得いきませんわ！男がクラス代表なんていい恥さらしです。私に、一年間もそんな屈辱に耐えろというんですの！？」

いや、その理屈はおかしい。

「実力から行けば、入試主席である私になるのは必然ですわ。それを、物珍しいからといって、極東の猿にされては困ります！まあ、ISを動かせるその一番前の関の猿はいいとしましょう」

織斑が人類という枠からはずされたようだ。織斑がムスっとして

いるが、まだ耐えている。が、流れるに次は俺がなにか言われる番だな。

「DSSDでしたかしら？そこが作り出したISMドキに、クラス代表が務まるとは思えませぬわ。所詮は猿真似で作った代物。ああ、猿にはお似合いの代物ですわね」

「おい、おま」

「黙れよ」

織斑が何か言おうとしたが、それをさえぎり俺は立ち上がる。おれ自身が馬鹿にされるのはかまわないが、必死に俺の愛機を作り上げてくれた研究員達のこと馬鹿にされて黙っていられるほど俺は大人ではなかった。

「ああ、確かにISの猿真似で作上げたもんだらうさ。だがな、ろくに俺の使っているインフィニット・システムのことを知りもしないくせにでかい口たたくんじゃねえよ」

「そのくらい知っていますわ。ただか一研究施設が宇宙を目指しているだけじゃありませんの。まったく、どこの援助も受けられないとは可哀相ですわね」

「まったく分かっていないな。援助を受けられないんじゃない。援助を断っているんだ。いいだろう、そんなにISが優れていると思っっているなら俺がお前を倒してやるよ」

「望むところですね。この代表候補生であるセシリア・オルコットに勝負を挑んだことを後悔するといいですわ」

お互い視線に火花を散らしながらにらみ合う。お互い、今すぐにも勝負を始めようとしている。それを見かねたのか、織斑先生が溜息をつきながら、解決案を提示してきた。

「よし、では一週間後にアリーナで対戦を行いクラス代表を決定するでしょう。参加者はオルコット、矢上、織斑の三名だ。各自、準備を怠らないよう」

「ちよつ、千冬姉！俺もかよ!？」

「織斑先生だ、馬鹿者が。それに、自薦・他薦を問わないといった推薦された時点で貴様の参加は決定している」

「ハッ、覚悟しておくんだな」

「あら、わたくしに勝てると思っているのなら、その鼻へし折って差し上げますわ」

こうして、入学初日は過ぎていった。

「星を目指す者」(後書き)

タイトルから主人公の機体を当てた人はおそらく正解です。スターゲイザーで黒と言ったらあの機体しかありませんからね。でも、名前は言わないでおきます。

バレバレだけど、楽しみにしておいてください。

今回は龍也とオルコットの対決。

なのはの戦闘よりすらすら脳内で戦闘シーンが沸きあがってきたんだがどうしたものか。

く激突する黒と蒼く（前書き）

過去最大のボリューム。まさか戦闘シーンでここまで描写できるとは。

人よりメカのほうが書きやすいのかねえ。

さて、いよいよセシリアとの戦闘。主人公の機体が明らかに！



## 〈激突する黒と蒼〉

第一章 星を掴むために

〈激突する黒と蒼〉

いろいろあって一週間が経過した。

初日の放課後、織斑が幼馴染の篠ノ之という『の』の回数を間違えそうな名前の女子と同じ部屋になったり、俺が個室を獲得していたのをうらやましがったりといったイベントがあった。

ちなみに、初日に二人の部屋の扉は何かあったのか分からないが壊れたらしい。本当に何があった。

ちなみに俺が個室を獲得できたのはかなり前に入学が決定していたからだ。織斑よ、恨むなら貴様の入学が決定した時期をうらむがいい。

初日以降、授業以外は自室にこもって愛機の微調整を繰り返していた。俺の機体はまだ未完成なのでデータを取ってフィードバックしたかったが、生憎とアーリーナの使用許可がおりなかった。

ISのほうで俺の機体より優先らしい。こちらも無理やり入学をねじ込んだ経緯があるので強く出れないので引き下がるしかなかった。

そして、決戦当日。織斑のISの到着が遅れているとのこと、先に俺とオルコットの試合が開始されることとなった。

「なあ、等。気のせいかも知れないんだが」

「そうか、なら気のせいだろう」

「俺にISのことを教えてくれるって話はどうなったんだ？」

「……」

「眼を逸らすな！」

織斑から話を聞くと、どうやら一週間剣道ばかりやっていたらしい。うん、確かに身体作りは大事だ。自分の動きがそのままトレースされてISは動くからな。だが。

「さすがに基礎的な部分は教えてあげてあげておくべきだったんじゃないか？」

「し、仕方がないだろう！こやつはここ数年で腑抜けて剣の腕が落ちていたのだ！だからIS以前に一夏の性根を叩き直そうと！」

「あー、うん。俺が悪かった」

顔を真っ赤にして篠ノ之は叫んでくる。確実に照れ隠しだな。さらに、織斑にホの字と見える。うん、ご馳走様です。もうおなかいっぱいだ。織斑爆発しろ。

「矢上、そろそろ時間だ。準備をしろ」

「了解つと。行くぞ、『スターゲイザー』」

胸から下げている円状のペンダントにそう声をかけると空中に『Infinity System Start』と文字が表示される。その表示が消えると、俺の全身をライトグレーの装甲が覆っていく。そして、すべての装甲が展開すると背中に大型のウイング状のものが展開される。

ストライクノワール。俺が使用しているISのコードネームだ。腰にビームライフルショーツィと呼ばれるハンドガン型のビーム銃、背中の大型の翼には左右にソードとレールガンがそれぞれ一個ずつ装着している。

インフィニティ・システムとは、基礎フレームと呼ばれる汎用性を重視したものを装着し、背面に用途インフィニティシステムごとに用意されたさまざまな追加装備を装着する。それこそ、無限の機能の名前の由来である。

また、インフィニティ・システムにはもう一つの特徴がある。それは、自己学習型のAIが搭載されている。IS学園に入学が決定する直前に完成したためまだこのAIは赤子のようなものだ。しかし、短期間であるが俺や研究所のスタッフと過ごすことで多少の学習は出来たようである。こちらから声をかければ簡単な返事はしてくれるようになった。といっても、文字表示での返事だが。そして、そのAIの名称が『スターゲイザー』だ。

簡単に説明すると、インフィニティ・システムは自己学習型のAIを搭載したパワードスーツのようなものだ。

さて、説明はこのぐらいにしてそろそろ出るか。

移動してカタパルトに脚部を固定させる。固定されたのを確認す

ると、徐々に前方にあるハッチが開いていく。そして、完全に開き外からの光が差し込む。

「矢上 龍也、ストライクノワール出る！」

背部スラスターの推進力とカタパルトの速度が合わさり、勢いよくアリーナへと飛ぶ。

アリーナには、すでにオルコットが待機していた。

「ようやく見えましたわね。わたくしと戦うのが怖くて逃げたのかと思いましたわ。しかし、全身装甲でこの私にかてるとお思いですか？」

「ぬかせ。逃げる理由がない。それに、ただの全身装甲だと思っていると痛い目を見るぜ」

お互いの視線が火花を散らし、開始の合図を今か今かと待ち構えている。

そして、試合開始の合図が鳴り響く。

「踊りなさい！このわたくしとブルーティアーズの奏でるワルツで！」

「ストライクノワール、目標との交戦を開始する！」

二人が同時に動く。こちらは腰に装着しているハンドガンを装備する。オルコットは開始早々こちらに向かって銃を撃つ。肩部のス

ラスターを噴射し、空中でサイドステップを踏むかのようによける。

よけると同時にこちらにもハンドガンの引き金を引き、ビームを連射する。相手は腐っても代表候補生。こちらの攻撃をなんとかよけている。

「ちっ、出だしからとはやってくれる。流石候補生と言ったところか。だが、始まったばかりだ！」

「ビーム兵器！？わたくしのスターライトmk？でも、レーザー兵器止まりですのに！？」

肩のラスターを細かく噴射しながら左右に動きながら移動し、オルコットに迫る。それに対し、オルコットは背部に装着していたスラスターを射出しながら後退し、こちらに向かいレーザーでこちらに攻撃をしてくる。

『特殊兵装と仮定。詳細は不明。念のため周辺を警戒』

スターゲイザーがブルーティアーズから射出されたものを解析し、警告のメッセージを出す。

「なるほど、第三世代機特有の特殊兵装か。だが！」

空中でバク転し、一番高い場所にたどり着くとほぼ同時にハンドガンを連射する。十発ほど撃ち、その内四発ほど命中する。威嚇のために撃ったとはいえ、もう少し当たるかと思っていた。射撃訓練をもう少しがんばるか。

このハンドガン、連射性能を追求したためビーム兵器本来の火力

は失われており、一撃一撃の威力はIS用のハンドガンと同等まで落ちている。しかし、本体のエネルギーを直接使っているため、本体のエネルギーが尽きるまで弾切れを起こすことはない。

「くつ。でも、減ったシールドエネルギーはたいしたことありませんわね。お行きなさい！ブルーティアーズ！」

周辺に散らばっていた、先ほどオルコットが射出していた自立兵器が動きはじめ、こちらを狙ってくる。どうやら浮遊型のビット兵器だったようだ。徐々に自分を中心として、四方を囲まれる。

「くそつ、面倒な！」

流石に四機を同時に相手にするのは難しいと判断し、まずは正面にあるものを攻撃対象にする。照準をつけさせないため、細かく動きながら前のビットに向かい撃つが対象が思ったより小さくなかなかあたららない。動きを止めるとビットに狙い撃ちにされる。射撃武器では不利な状態だ。

「ならば！」

『セレクト、フラガラッハ？ ビームブレード』

ハンドガンを腰に収め、背部のウィングを大きく開く。そして、左右についている細い砲門のようなものをそれぞれの手で握る。握ることにより、翼のロックがはずれ、そのまま引き抜く。

大剣の刃の部分がビーム状のブレードが姿を現す。フラガラッハ？と呼ばれる剣だ。いくつもの試行錯誤が繰り返され、最終段階までできてこの名がつけられた。いわば、フラガラッハの第三世代だ。

「斬る！」

細かい移動は無くし、一直線へ前方のビットへと向かい通り過ぎざまに切り捨てる。まずは一機撃破。

足の裏のブースターを吹かし急制動をかけすぐさま次のビットへと攻撃を加えていく。一機、また一機と撃破していき次々と落ちていく。

浮遊していた四機のビットを落として立ち止まる。

「や、やりますわね。わたくしのブルーティアーズをすべて破壊したのはあなたが初めてですわ」

「そいつは光栄だ。このままお前にも勝つ！」

全速力で、オルコットに斬りにかかる。だが、そんな俺に対しオルコットは口の端を吊り上げた。

「かかりましたわね！」

オルコットのブルーティアーズの腰部分に背面のスラスターが前に出てくる。

「ブルーティアーズは四機ではなくってよ！」

その言葉とともに前面に出てきた部分から二発のミサイルが発射された。

「なっ!?!」

オルコットの数メートル先で大きな爆発が起こる。

side オルコット

「やりましたわ!」

自らの罠にはまったのを確認し、喜びの声を上げる。ふふ、誰もブルーティアーズが四機とは言っていないせんわ。徐々に煙が晴れてきたので、わたくしに楯突いて来た極東の猿の姿を確認します。が、その場には誰も居ません。

「ど、どこに行きましたの!?!」

あたりを見回すが、どこにも見当たりません。確実にやったと思っていたので気が緩んでいました。

そこへ、二筋の光が着弾する。防御フィールドがあるので、物理的なダメージはないが

「きゃあ!」

シールドエネルギーをすぐさま確認するが、今の攻撃で半分以上のシールドエネルギーを持っていかれてしまった。確認が終わると、攻撃された方向へ向き直る。

「レール……ガン……?」



視線の先には、灰色の装甲から黒・ライトグレーを基本色としたカラーへと変わっていた。そして、背部の翼からは、放電している砲門が構えられていた。

レールガンというものは、十数年前から形として完成していた。しかし、それは大型の戦艦などに取り付けるようなサイズで、だ。ISサイズのレールガンは、つい最近ドイツで試作機かが完成したということしか聞いていない。まさか、ドイツよりも先に完成させたのだろうか。

「ノワールパックとの接続部に予想以上の負荷確認、っと。レールガン単体だったらまだしも、ウイングとの接続部に負荷か。もうちょよつと強度上げないとな」

何かつぶやいているようですが、耳に入りませんでした。

そして、私は実感しました。DSSDを甘く見ていた事、そして、彼を甘く見ていたことを。

DSSDは間違いなく世界でもトップレベルの技術を所有している。そこで、私は彼が入学式の日に行ったことを思い出した。

『援助を受けられないんじゃない。援助を断っているんだ』

今思うと彼の言うことはもっともです。支援を受けるということは、支援した人物に技術を公開せざるおえなくなる。もし、彼らの技術が流出すれば世界のパワーバランスはISが登場した時とはいえないまでも、パワーバランスが崩れることは間違いありません。

それに、彼自身も強い。いくら兵器が優秀であろうとも、使う人物が駄目ならばその兵器はたちまち欠陥兵器へと姿を変える。あれらの武装は取り回しがよさそうですが、切り替えの方法やそれらを扱う技術は難しいもの。銃の命中精度はアレですが使いこなしているというのは彼自身の技術が優れている証。

ドクン

ふと、自らの理想の男性像を思い出してしまった。

『自分の父親とは違い、力強い男性』

自分の理想に限りなく近い男性が今、目の前に居る。戦っているというのに意識をしてしまう。自分でも、少し顔が赤くなっているのが分かってしまいます。しかし、今は戦闘中。頭を振り雑念を振り払います。

再び、視線を彼のほうへ向けると彼自身もこちらに向き直っていた。

side 龍也

オルコットの発射したミサイルは流石にやばかった。こちらも、ISの絶対防御と呼ばれる操縦者の安全を守るためのシステムはあ

るが、あちらほど安全性は確立されていないからな。まあ、悪くて骨折ぐらいの安全性はある。これは俺自身が確認済みだ。

さて、オルコットの攻撃を回避した方法だが案外あっさりしたものだ。

ノワールの脚部には、爪先と踵の二箇所に小型のアンカーが仕込まれている。

ちなみに、手のひら部分とバックパックの中心部にも仕込まれている。

ミサイルが発射される前にスターゲイザーが危険と判断。すぐさま爪先のアンカーを地面へ向けて射出。そして急速に巻き取り急降下を行う。そして、ヴァリアブルフェイズシフトという対物理攻撃にめっぽう強い特殊な装甲を展開する。これがノワールのカラーリングが変わった理由だ。しかし、この装甲にも欠点がある。発動している状態のときは常時エネルギーを消費する。さらに物理攻撃に強いといっても、人間の腕力で生み出される攻撃レベルしか防げない。ISの攻撃を受けても多少ダメージが軽減される程度のものだ。場合によってはダメージを受けて減るエネルギーよりも、装甲を展開して受けたダメージのほうが消費エネルギーが多かったりする。使いどころが難しい装甲だ。

今回の場合は、ミサイルの爆発による破片でのダメージを軽減するために使用した。

着地した後は、アンカーを地面から抜き爪先に格納。レールガンを撃ちやすい位置へ移動し、彼女が油断しているところをズドンと撃ったわけだが、ウイングとの接続部分が発射時の反動で調子がお

かしくなってしまった。もうレールガンは使えないだろう。

「ノールパックとの接続部に予想以上の負荷確認、っと。レールガン単体だったらまだしも、ウイングとの接続部に負荷か。もうちよっと強度上げないとな」

戻ったら開発スタッフに伝えなければ。

左手に装備していたフラガラツハ？をウイングに収める。そして、再び左手にのみハンドガンを装備する。

改めてオルコットへ向き直る。

「次で決めるぞ、スターゲイザー」

『了解』

スラスターの出力最大にし、左手のハンドガンを連射しながら近づく。時たま、左右にブーストをかけながら標準をつけさせないようにする。

ここで、少し違和感を覚える。先ほどよりオルコットの動作がワントンポ遅れている。しかし、気にしては足元をすくわれかねないので今は捨て置くことにする。

「これで、終わりだー!!!」

オルコットのそばを通り過ぎると同時に右手のフラガラツハで切りつける。攻撃があたり、そこでブルーティアーズのエネルギーが0となる。空中でブルーティアーズが格納されオルコット本人が地

面へと落下していく。あわてて武器を直してなんとか抱きとめ、着地する。

「勝負ありだな。勝者、矢上龍也」

織斑先生の放送で、第一試合が終了した。

放送後、ノワールの展開をときオルコットの肩を支えて立ち上がらせる。

「あー、大丈夫か？」

「え、ええ。もももも、問題ありませんわ」

「本当に大丈夫か？」

「問題ありません！それよりも、ありがとうございます」

「何、問題ないさ」

オルコットをそのまま医務室へと連れて行き、二回戦目である織斑との試合に臨もうとした。

どうやら、俺の試合を行っている間に専用機である百し……じゃない、白式が到着しファーストシフトまで終えたらしい。

アリーナに到着して、次の試合のためにノワールにチェックをかける。

「これは酷い」

機体の間接部。主に脚部にダメージが蓄積されていた。おそらく、ミサイルを回避したときの無茶な機動のせいだろう。ISと違い自己修復機能がないのが痛いところだ。予備のパーツはあることはあるが、交換しているとアリーナのの使用時間を過ぎてしまう。

不本意だが、棄権し『クラス代表』という名誉を織斑に譲ることにした。正直、やりたくもなかったので願ったりだ。

織斑よ、クラス代表としてがんばってくれたまえ。応援だけはしてやろう。

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じた。

『矢上龍也、及びストライクノワールの戦闘データアップデート。高機動戦による戦術パターン追加。射撃での標準補正アップデート。近接戦闘時のエネルギー分配変更。ストライクノールへ変更箇所適用』

『セシリア・オルコット、及びブルーティアーズの戦闘データ追加。ビット兵装のデータアップデート。……………への適用開始。……………システム構築完了まで……………日』

く激突する黒と蒼く（後書き）

実はこれを書いているとき、武装神姫というゲームのOP曲である「RIDE ON」と「孤高のカタルシス」という曲をエンドレスで聴いて作成。いい曲なので、機会があればぜひ一度聞いてみてください。

さて、出てきましたストライクノワール。にじふあんでステージイザーをカタカナ表記と英語表記で検索かけたら8件しか出てこなくてちよつとへこんでます。

機体を犠牲に勝利を取った龍也。次回は代表決定後のパーティーと中華っ娘の登場までを予定。あくまで予定です（あ

〈決定する代表〉（前書き）

ここまでの平均テキストバイト数 10・5 kb

なぜか毎回10 kbぐらい書かなければ といつなぞの義務感を感じ始めた。

いや、少なくともいいんだけどそのぐらいの分量書かないと納得いかない というかw

ラストにはとうとうチャイナ娘登場



〈決定する代表〉

〈決定する代表〉

side セシリア

「まけ……ましたわね」

代表決定戦の後、自室でシャワーを浴びる。大浴場もあるが、さすがに今は大勢の人と一緒にいる気にはなれません。

「男性だから、と言って甘く見ていたが敗因ですわね。いえ、あの状況ですと本気になっても勝てたかどうか……」

少なくとも、ブルー・ティアーズを使い始めた所からは間違いなく本気で戦っていました。しかし、それでも彼にはかなわなかった。そのとき、わたくしが積み上げてきたものが一瞬で崩壊してしまつたような気がしました。

でも、彼のおかげで気付けたこともありました。いかにわたくしが狭い視野でものごとを見ていたことを。そう言った意味では彼に感謝しなければなりませんね。

「矢上……龍也……」

自身を打ち破つた男性の名前を思わずつぶやく。すると、急激に顔が赤くなるのを感じる。名前をつぶやいただけだというのに、どうしてこのようなことに。

少し頭を冷やさなければと、少し温めの温度にしようと蛇口をひねる。

「きゃっ！」

ひねりすぎたのか、シャワーは水と変わらない温度になって私の体をつつた。あわてて元の温度に戻す。

「オルコットさん、大丈夫ー？」

「え、ええ。大丈夫ですわ」

先ほどあげた小さい悲鳴がきこえたのか、ルームメイトの方にも心配をかけてしまいましたわ。

今一度、彼のことを考えて鼓動が早くなる原因を考える。

「もしかして……一目ぼれ、というものでしょうか。いえ、それなら入学初日になっているはずですよ」

こういったことは初めてなので、自分の気持ちに整理がつかせせん。チエルシーにこんど相談してみましよう。

今日は疲れましたわ。早めに休みましよう。ああ、その前に彼に謝りにいかなければ。

「は〜い。珍しいね、君から連絡くれるなんて」

電話口から妙に明るい声が聞こえる。ストライクノワールとスターゲイザーの開発主任であるアルバート・ウエスタンだ。ウエスタンという名前ではあるが、本人は欧州出身である。通称はアルだ

「ノワールパックのレールガン接続部がイカれた。ちゃんとテストしたんだろうな？」

「あー、やっぱりね。君の入学に間に合わせるための急造だったからね。今改良版をこちらで作ってはいるけど、強度の問題で完成はやっぱりもうすぐ先かな。来週あたりにストライカーパックを三種もって行くよ。それで当面はどうにかなるかな」

「ああ。レールガン以外は無事だから当分はこれですごすよ。それで、I W S Pはどうなっている？」

「目下検討中。設計図はできてるから作り始めればすぐなんだけだね。まあ、アレの製法をどうするか確定したらってな感じかな」

「とりあえず、週末に」

「うん、それじゃあね〜」

アルとの電話を切り、シャワーを浴びようとシャワー室へ向かうとすると控えめなノックの音が聞こえた。

「はい」

「あ、あの、セシリア・オルコットです。少々お時間よろしいでし

「ようか？」

オルコットが部屋を訪ねてきた。どういつ風の吹き回しだろうか。まあ、こちらとしては今日の模擬戦でケリを付けたつもりなので、彼女自身には恨みはもうない、わけではないがあの時ほど起こっているわけではない。

「ああ、待ってくれ。今あける」

まあ、話だけでも聞くかと思い、扉を開けるとそこには私服というかラフな格好のセシリアがいた。

「先日は大変申し訳ありませんでした。あなたや、あなたの所属するDSSDの悪口を言ってしまったって……」

これは驚いた。あれだけ自信過剰だった彼女がここまでしてくるとは思わなかった。

「あ、ああ。気にしないでくれ。俺も悪かった。頭に血が上っていたとはいえ俺も言い過ぎた。すまない」

オルコットに伴って俺も頭を下げる。彼女がこうやって謝ってきたのだ。こちらとしてももう怒る理由がなくなってしまった。

「いえ、事の発端は私ですので。それにしても、本日の試合は驚きましたわ。まさか、インフィニティシステムがあそこまでISに対抗できるなんて」

「まあ、俺のは対IS用にカスタマイズされてるからな。元々はISと同じ宇宙空間での活動を視野に入れたフォーマルスーツだがな」

「そうでしたの。ああ、本日は遅いのでこれで失礼させていただきますわ。それでは『龍也』さん。お休みなさいませ」

今、オルコットは何と言った？名前のほうで呼ばれた気がしたが……。

「あ、ああ。お休み、オルコット」

突然のことで言葉に詰まってしまったがなんとかオルコットに返事を返す。

「セシリアでかまいませんわ」

とびつきりの笑顔でそう返されてしまった。オル、いやセシリアはそう告げると自室の方へと戻っていった。

「はじめてDSSDの関係者以外の女性から名前と呼ばれたな」

女性だらけのIS学園で気が滅入っていたが、そう悪いものでもなさそうだ。

翌日

時間は午前七時半。俺は朝食を食べるために食堂に来ていた。ご飯に味噌汁、鮭の塩焼きといった簡単な定食を受け取り席につく。

「おはようございます、龍也さん。お隣、よろしいかしら？」

「ああ、オル……セシリアか、おはよう。別にかまわないぞ」

俺の了解を得て、セシリアが隣に座る。彼女の朝食は、ロールパン二つにサラダとスープといったものだった。

「お、龍也じゃないか。ここに座らせてもらうぜ」

いざ食べ始めようとすると、織斑と篠ノ之がやってきて俺たちの正面に座った。なぜか、すさまじいぐらいの殺気を横から感じられる。向けられている方向は織斑の方だが。そしてやつはそれに気付いていない。肝が据わっているのか、鈍くて気付いていないのか。おそらくは後者だな。

「すまないな、邪魔をしてしまったようだ」

「いいえ、かまいませんわ」

篠ノ之が謝罪すると、それに笑顔で答えるセシリア。先ほどの殺気はどこかへ消え去っていた。何だったのだろうか。

「それにしても、二人が一緒なんて珍しいな。何かあったのか？」

「別にな」

「ええ、昨晚名前呼び合う仲になりましたの」

俺が何もないと返事をしようとした所、セシリアが誤解を招きそうな発言をする。そして、その言葉で食堂の時間が止まった。おそらく、全員が俺とセシリアがそんな関係になったと思ったのだろう。

「へえ。いや、よかったよかった。クラスメート同士仲が悪いままってのはやっぱ気まずいもんな。二人とも仲直りできた見たいでよかったぜ」

うん、織斑よ。今日だけはその空気の読めなさをほめてやろう。

「っと、そろそろ急いで食わないと遅刻するな」

「ああ、そうだな」

まだ時間に余裕があるがゆっくりするには少し先ほどよりペースを上げないと間に合わないだろう。

そして、授業が始まった。

本日は初の屋外授業。ようはISを使用した授業だ。

「よし、織斑、オルコット、矢上。ISを装着して空を飛んでみる」

三人で一步前に出てそれぞれのISを展開する。

「ブルーティアーズ」

「いくぞ、スターゲイザー」

俺とセシリアは一秒ほどでそれぞれのISを展開する。が、一夏は多少展開するのに時間がかかっている。ISに乗り始めたばかり

なのでこればかりは仕方ないだろう。

「いったいつまでかかっている。熟練者は一秒もかからずに展開するぞ。オルコットに矢上は展開の時間をさらに短縮するようにしろ」

俺たちとはもかく織斑にはそれはひどいと思うが。

「よし、上空に飛んで地上十センチで急停止してみる」

「龍也さん、行きましょう」

「ああ。わかった」

お互いに頷きあつて上空へ飛び上がる。それに遅れて織斑も上空へやってきた。

「どうも飛ぶ感覚がつかめないんだよなあ。原理なんかもわかんないし」

「説明してもかまいませんが、反重力やら力学の話になりますわよ」  
「？」

「うへっ、余計わけがわからなくなりそうだ。二人ともなんかコツつてあるか？」

「私は昔からこういうものだとしか考えていませんでしたから」

「俺も似たような感じだな。というか、俺のは参考にならないと思っぞ」  
「っぞ」



「そうだったな。でも、こつこつついてると酔いそうになるんだよな」

「大事なのはイメージだ。昔、生身で空を飛びたい　とか思ったことは一度ぐらいはあるんじゃないか？まあ、そうでなくても飛んでいる自分をイメージするってのが一番の近道だろうな。イメージがちゃんとしているなら、あとはISがフォローしてくれるはずだ」

「そんなもんなのかなあ」

「いつまで喋っている！さっさと急降下をしろ！目標は地表十センチだぞ」

下のほうで織斑先生がどなっている。すこし喋りすぎたようだ。

「それでは、お先に失礼しますわ。龍也さん、織斑さん」

そう言つや否やセシリアは急降下して行った。結果は予想通り合格ラインだった。

「結構簡単そうだな、よし、次は俺だ！」

遠目から見ていると簡単そうに見えるが、急停止というのは高度な技術が要求される。見よう見まねでやっても無理だろうな。というか、何故できるのかと思っただのかが知りたい。

案の定、織斑は減速に失敗し地面へ激突。大きな穴を開けていた。

「何をやっているんだ、あいつは……」

とりあえず、こちらにも急降下急停止を行った。まあ、ほぼ十センチの距離でこちらにも停止することができた。

まあ、後先考えずに突っ込んだ織斑がわるいな、これは。

「何をやっているのだ貴様は！」

「いつつつつ」

「織斑、グラウンドの穴はしっかり埋めて置けよ。と、後先考えずに急降下しようとするところなる。各自、最初はゆっくりと降下と停止を繰り返しコツをつかめ」

「龍也。てつ」

「自業自得だ」

織斑が手伝ってほしそうにこちらを見ていたが、スルーした。

次は武装の展開の練習だった。当然選ばれたのは専用機持ちの俺たち三人。

「よし、順番に武器を呼び出してみる」

まずは一夏が雪片式型を呼び出す。が、当然のごとく呼び出すまでに時間がかかってしまう。大体十秒ぐらいだろうか。

「遅い、熟練されたものなら一秒もたたずに呼び出せるぞ。次、矢上」

頭の中で、グレネードランチャーがついたビームライフルを思い浮かべ呼び出す。一秒ほどして、右手の中にはビームライフルが握られている。

「IS 違いといえども、呼び出すスピードはまずまずだな。が、まだ遅い。一秒以内に出せるようにしろ。次、オルコット」

セシリアは右手を横に突き出しスターライトを呼び出す。

「さすが代表候補生といったところだな。が、そのポーズは直せ。誰に向かって撃つ気だ」

「し、しかし、これはわたくしのイメージを固めるため大切な」

「直せ。いいな」

「……はい」

その後は近接武器を呼び出す という訓練を行ったが、基本的に近接戦が想定されていないセシリアは武器名を呼んで呼び出すという初心者張りの動作をしてしまった。

そして、授業は終わりを迎えた。

「セシリアは近接戦が苦手なのか？俺のときもあまり対処できてなかったが」

「ええ。というより、機体の性能からして近接戦を考慮していません。わたくしのブルーティアーズはオールレンジ攻撃で敵を牽制、

もしくは撃破。取りこぼした分をスターライトで狙撃、という形です。ただ、ブルーティアーズをほかの動作と一緒に使う、ということができませんで」

「俺でよければ訓練相手になるぞ。こっちも、通常のISじゃないから訓練場の申請がなかなか通らなくてな。できれば一緒に訓練してもらいたい」

「iiiiiiiiii、一緒にですか!？」

「あ、ああ。いやなら諦めるが」

「そ、そんなことはありませんわ。ぜひやりましょう、ぜひ」

「よ、よろしく頼む」

オルコットの勢いに押されながらも俺たちは教室へと向かった。途中、織斑の声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

「ということ、クラス代表は織斑一夏君になりました。一つながら縁起がいいですね」

放課後前のSHRで山田先生から衝撃的な事実（織斑に対してのみ）が告げられた。

「ちよつ、俺一回も戦ってないんだけど!？」

うん、織斑は一度も戦ってはいない。だが。

「事実上、あの決定戦で優勝したのは間違いなくお前だ。それに、俺はなりたくてもみんなと同じISではないからその時点で資格はない。あくまで俺はセシリアと決着を付けたかったただだからな」

「私の場合は、龍也さんに負けた時点で資格を失っていますわ。ですので、それらを考慮すると織斑さんが代表になるのが一番かと」

その言葉を聴いて落ち込んでいる一夏に向かい、肩をたたく。

「織斑、あきらめろ」

サムズアップをし、いい笑顔で織斑に止めを刺す。こうしてわがクラス代表は織斑となったのだ。

「ふーん、ここがIS学園ね。待ってなさいよ、一夏」

夕暮れ時のIS学園校門前、一人の少女が校舎を見上げつぶやいていた。

〈決定する代表〉（後書き）

セシリア鼻肩がひどい作者です。というか、一夏と尊の出番がどんどんなくなっている。

たぶん、次回からと一夏と尊の台詞が増えるはず！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9411y/>

---

IS ~星を目指す黒~

2011年12月19日00時54分発行